

## 国際哲学オリンピック (IPO) と哲学教育

梶谷真司 (東京大学)

### ○IPO の歴史と目的

国際哲学オリンピック (International Philosophy Olympiad) は、世界中から高校生が集まり、哲学的なテーマについてエッセイを書いて競う国際大会である。国際哲学協会連盟 (FISP) が後援、ユネスコが協賛している。1993 年に 6 カ国 (ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、ポーランド、トルコ、ドイツ) の代表有志によって始まった。第 1 回大会はブルガリアで開かれ、ブルガリア、ルーマニア、トルコが出場。それ以来、毎年 5 月、ホスト国を変えて国際大会を開催している。出場国も年を追って増え、現在では 40~50 カ国が参加するまでになった。目的は、各国の中等教育 (中学・高校) における哲学教育の支援、批判的・探究的・創造的思考力の育成、科学や芸術や社会生活についての哲学的省察の促進、現代世界の諸問題についての倫理的省察能力の育成、哲学を通じた世界中の若者の交流の奨励である。

### ○エッセイライティング

国際大会に出場できるのは各国高校生 2 人まで (開催国は 10 人まで)、教員 2 人までで、教員は全員エッセイの審査を行う。哲学者の言葉が 4 つ与えられ、その中から一つを選んで、それに関連するエッセイを書く。制限時間は 4 時間、母語以外の英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語のいずれかの言語で書くことになっており、語学の辞書のみ使用が認められている。

評価基準は 4 つある——①課題文のトピックとの関連性 (4 つのうちでテーマとして選んだ課題文の内容と、エッセイの内容がどれくらい関連しているか)、②トピックについての哲学的理解度 (課題文の内容について、どれくらい哲学的な知識があり、相応の議論が組み立てられるか)、③議論の説得力 (根拠や具体例を示したり、予想される反論に答えてたりしているなど)、④議論の首尾一貫性 (トピックが相互に関連し合い、議論の展開が分かりやすい)、⑤オリジナリティ (ただ誰かの思想や意見によりかかるのではなく、きちんと自分の考えを述べている) である。

### ○日本の参加と国内予選

日本は 2001 年の第 9 回大会から同志社大学名誉教授で英文学の専門家である北垣宗治氏の尽力により参加しており、翌 2002 年には東京大会が開かれている。発表者の梶谷は 2012 年から協力、2014 年より北垣氏の後任として日本委員会の委員長を務めている。国内予選は、上廣倫理財団が主催する「倫理哲学グランプリ」というエッセイコンテストが兼ねており、そのメダリストから国際大会に出場する代表選手を選抜している。いずれも、国際大会同様、哲学者の言葉から自由に問いを立ててエッセイを書く形式で、評価基準も国際大会に

準じている（国内予選は日本語、選考会は英語で行っている）。

#### ○選手育成と成績

選手育成のため、梶谷は高校生のための哲学サマーキャンプを開催し、哲学に関心をもつ高校生たちを集めてエッセイの書き方を指導するとともに、彼らの交流を図っている。昨年からはウィンターキャンプも開催し、研究者によるレクチャー、グループディスカッション、全体討論を行っている。今年からはスプリングキャンプも行っている。こうして哲学に興味をもつ高校生を増やし、すそ野を広げている。そうすることで選手の層も厚くなり、代表となる高校生のレベルも上がると考えている。さらに、選考会で日本代表となった選手には大会出場まで2か月ほど、エッセイライティングの指導と添削を行っている。その成果かどうかは分からないが、日本の受賞歴は、2007年に奨励賞、その後2014年に奨励賞、2016年に奨励賞、2018年銅メダル、2019年に銅メダルと奨励賞、2020年に奨励賞、2021年に銀メダル、2022年に奨励賞となっており、近年は毎年のように入賞を果たしている。

#### ○哲学教育と語ることと書くこと

IPOを哲学教育の一つとして見た場合、そこでいちばん重要なのは「書くこと」である。近年の日本の哲学教育においては、対話や討論のように「語ること」に関心が集まっているように見える。しかし、思考力の育成のためには書くことが必須である。書くことを教えるのは一般に難しいと思われがちだが、私はキャンプにおいて、グループでの対話と組み合わせることで文章のストラクチャー（構成）を明確にするという仕方とこれに取り組んでいる。この対話的文章法は、どのような参加者であっても容易にできるため、様々なところで活用できるが、哲学教育においても効果的である。

#### ○考えを分かち合うの楽しさとコミュニティ

もう一つ私が哲学教育において重視したいのは、共に語り、考えることの楽しさである。IPOでもキャンプでも、高校生たちは自分たちが考えていることを語り合い、分かち合うことを心から楽しみ、それを通して特別な仲間となる。そのことが彼らに考える力を与える。この点もまた、哲学教育において注意が払われていない点ではないかと思われる。私自身は、考える楽しさとコミュニティ作りのために、夏だけではなく、冬と春にもキャンプを開催している（2020年からはオンラインで行っている）。

当日は、現在東京大学大学院博士課程で哲学を研究している石川知輝君と、厚生労働省に勤務している塚原遊尋君にも登壇していただく。二人は上で述べたすべて、キャンプ、選考会、国際大会に参加し、さらに大学生になってからはキャンプのチューターとしても協力してくれた。こうした多岐にわたるIPOへの関わりが、彼らの研究や仕事、人生にとってどのような意義をもったのか。それぞれの立場から話していただく。コメンテーターを寺田俊

郎会員（上智大学）にお願いし、司会は実施責任者の梶谷が務める。